慶應義塾大学学術情報リポジトリ
Keio Associated Repository of Academic resouces

Title	ペルシャ時代のエン・ゲヴ
Sub Title	The recent discovery of the Persian site at Ein Gev
Author	牧野, 久実(Makino, Kumi)
Publisher	三田史学会
Publication year	1997
Jtitle	史学 (The historical science). Vol.66, No.2 (1997. 1) ,p.153(301)- 168(316)
JaLC DOI	
Abstract	
Notes	研究ノート
Genre	Journal Article
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00100104-19970100-0153

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the KeiO Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

研究ノート

ペルシャ時代のエン・ゲヴ

牧野久実

本稿の目的

日本聖書考古学発掘調査団（団長　金関　恕）は、一九九〇年から一九九二年にかけてイスラエル国北部ガリラヤ湖の東岸にある都市遺跡エン・ゲヴの発掘調査を行った（図1）。この遺跡は一九六一年にB・マザールらによって試掘が行われており、その際におおよその遺跡の範囲や時代について予測が得られていたが、今回初めて行われた組織的調査によってヘレニズム時代、ペルシャ時代、鉄器時代に属する五つの文化層についてより詳細な状況が明らかにされた[1]。本稿ではこのうちのペルシャ時代の内容について、土器および遺構に関する資料を基に、初期ヘレニズム時代とも関連させながら検討を行う。

従来の研究とその成果

ペルシャ時代のパレスチナ考古学については、あまり注目されていないのが現状である。それは、考古学研究上の区分（先史、聖書、古典）のいずれの興味の対象にもなりにくく、また、ペルシャ時代の遺跡は実際に層として検出されることが少なく、遺構として検出される場合も竪穴のみであった、という二点が主な理由である。

これまでのパレスチナの考古学は、先史時代や原史時代を別にすると聖書の記述に基づく動機による調査が多かったために、ペルシャ時代とヘレニズム時代についてはあまり研究者の関心を集めなかった。また、古典時代以降の調査は考古学的な研究よりもむしろ歴史的な研究が主体となっている。このため、ペルシャ時代、および

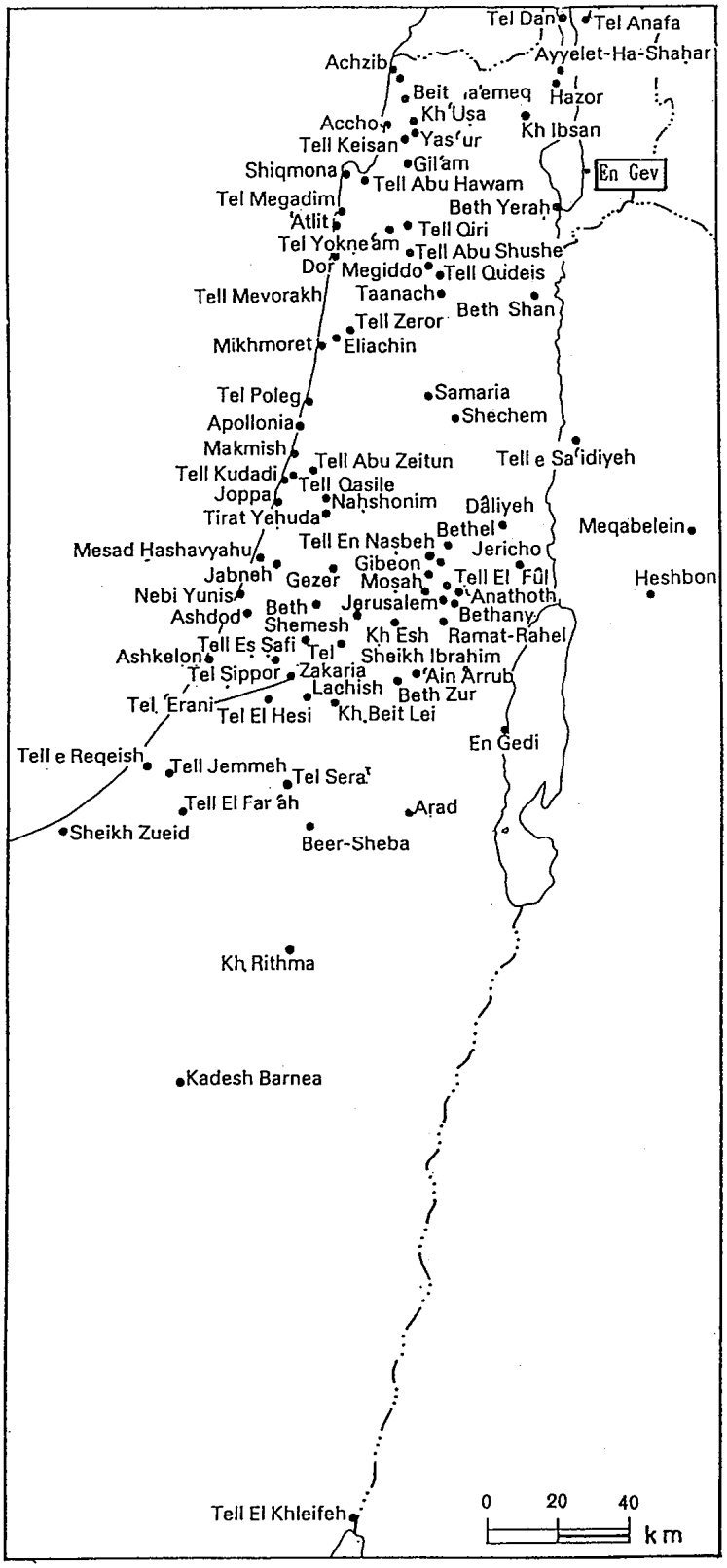

図1　パレスチナで発掘されたペルシャ時代の遺跡
注7所収　一部加筆

初期ヘレニズム時代の考古学的な研究は他の時代と比較してたちおくれているのが現状である。

また、ペルシャ時代の遺構の乏しさについて、C・ヴァッチンガーやW・F・オルブライト[2]は、第一神殿時代の末に大規模な破壊が行われた結果、ユダの都市生活が一時的にとだえ、紀元前三世紀になるまで元の繁栄を取り戻すことができなかったことが原因である、としている[3]。またK・M・ケニヨンは、テル・エン・ナスベやサマリヤの遺跡において、建築物の明確な遺構は見られないものの、豊富な遺物は存在することから、この時期のパレスチナは都市の衰退期にあたり、人々は各地に散在する小規模な村落で生活を続けていたと考えた[4]。同様に初期ヘレニズム時代の遺構の乏しさについては、この時期の気候の乾燥化を原因とした都市の衰退を主張する

説や、[5]プトレマイオス朝の政策による影響という歴史的な要因を主張する説[6]がこれまで唱えられてきた。

一方、ペルシャ時代から初期ヘレニズム時代の遺構は、マウンドの頂上にあるために浸食を受けやすかったり、頂上に無い場合でも後期ヘレニズム時代やローマ時代の遺構に破壊されている場合が多く、したがって、研究者の目に触れないだけである、という点も否定できない。実際、E・スターンは、一九八〇年代までにパレスチナ各地の遺跡の状況を詳細に観察し[7]、ワッチンガーやオルブライトの説はユダの南部にしか当てはまらず、実際には地域的な多様性があること、例えば、テル・エン・ナスベ、ギベオン、ベテル、テル・エル・フルといった遺跡に代表されるユダの北部やベニヤミンの地では神殿崩壊後も居住活動が続いており、また、南部、中央部の山岳地帯とは違って、地中海沿岸付近とガリラヤ地方は人口が密集していたことを指摘している。また、最近の調査ではいくつかの遺跡において明確な遺構が検出され、中にはおおよその町のプランが明らかにされたところもある。それは、テル・アブ・ハワム、シクモナ、テル・メガディム、マリシャ、テル・ミハル、ドールといった遺跡で、直交する二本の通りに挟まれた居住区がそれぞれ検出されている。これらはヒュポダモス式プランの一部と考えられる[8]。ヒュポダモス式プランとは紀元前五世紀のミレトス出身のギリシャ人の名前にちなんだもので、ペルシャ時代以降に一般的となる街路が格子状に計画された町のことである。典型的な例はギリシャのオリュントス（430BC-348BC）の例がある（図2）。特に、ドールからはペルシャ時代（計二層）とヘレニズム時代（計三層）の合計五層にわたって、ヒュポダモス式プランを基本としたプランが見られる。ドールでヒュポダモス式プランが最初に検出されるのは、オリュントスを約一世紀遡る前六世紀後半であり、現在のところヒュポダモス式プランの最も古い発見例である[9]。

ユダの南部やトランスヨルダン、エフライムの南部を含めたパレスチナ南部と、地中海沿岸部やガリラヤ湖を含めたパレスチナ北部に見られる居住活動の違いについては、居住していた民族の相違によるものとの説明がされた[10]。それは、物質文化の地域的な多様性に基づいたもので、フェニキア、パレスチナの沿岸部、そしてガリラヤ地方は、ギリシャ製品やエジプトの影響を示す墓が多く見られることから、主としてフェニキア人やアラム人が居住しており[11]、他方、まとまった遺構を残さなかった

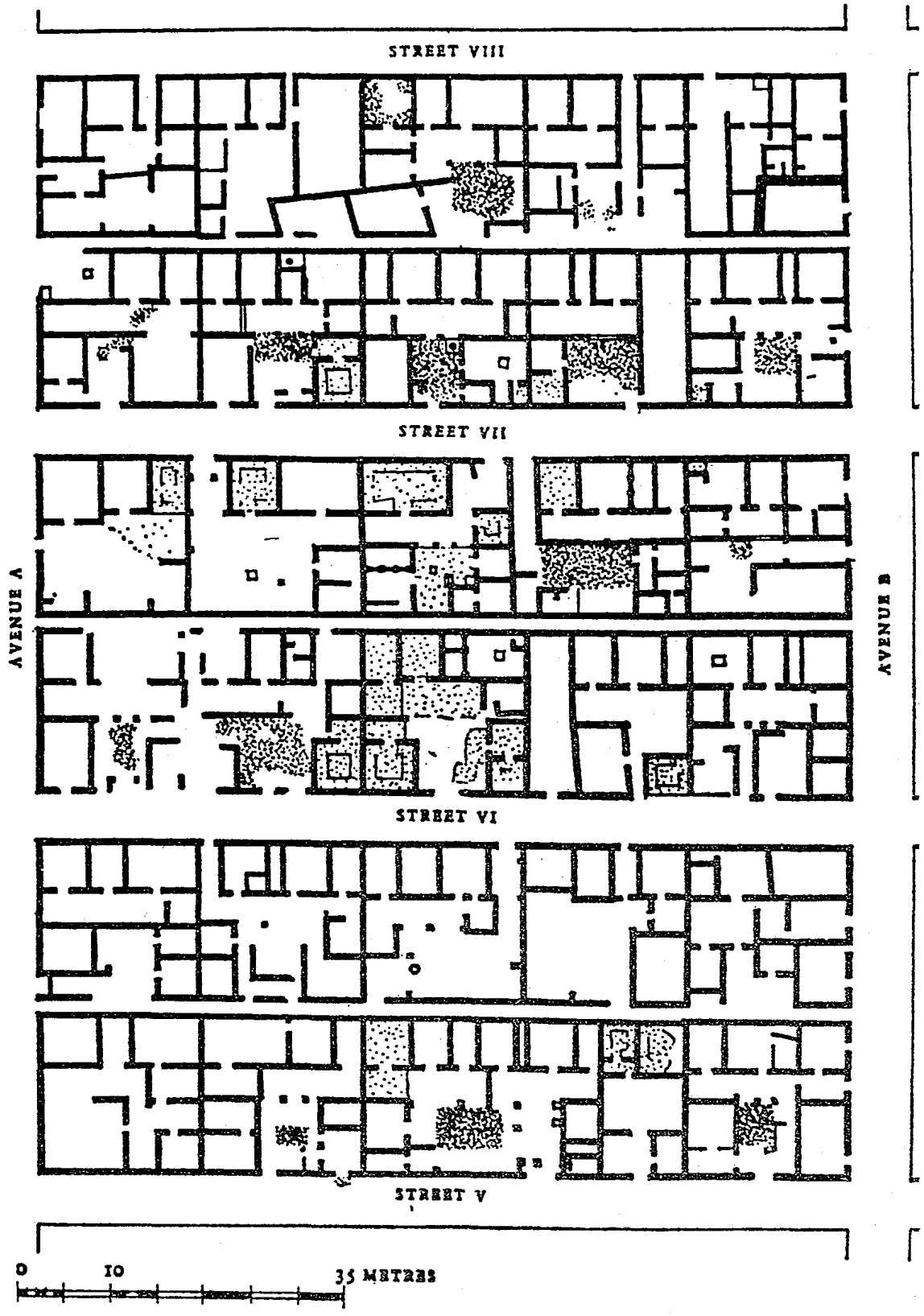

図2　オリュントス Excavation at Olynthus, D. M. Robinson, Baltimore, 1946. 所収

パレスチナ南部には、一部はバビロンから帰還したばかりのユダヤ人が居住していたという。

こういった傾向は初期ヘレニズム時代についても見られる。初期ヘレニズム時代のパレスチナの状況については、スミスが各地に遺跡の表面調査を行い、この時期に限定した明確な遺構は見られないまでも遺物は多くの遺跡の残されていること、特に地中海沿岸部やガリラヤ地方にはその傾向が顕著であることを示した[12]。実際、最近の調査からは、アッコ、テル・アブ・ハワム、ギラム、テル・メガディム、テル・メヴォラク、ジャッファ、テル・エル・ヘシ、サマリア、エルサレム、テル・エン・ナスベ・マリシャ、ラキシュ、ヘシュボン、そして既述のドールから、ペルシャ時代とヘレニズム時代にかけて連続して使用されたと考えられる城壁が検出されており、これらの時代にいくつかの段階は見られるものの、基本的には共通したプランによって町が建てられていた可能性を示している。

以上のことから、ペルシャ時代から初期ヘレニズム時代のパレスチナが第一神殿崩壊以降の都市衰退期に入っていたとするかつての見解は、最近の表面調査や発掘調査の結果によって見直されるべきである。実際には、この現象はペルシャ時代ではユダの地にほぼ限られたものであり、特に地中海沿岸部やガリラヤ地方はこれら時代にも活発な居住活動があったというように修正されねばならない。

ペルシャ時代に一般的な竪穴遺構

エン・ゲヴでは、ペルシャ時代の遺構として、直径一・八メートル、深さ二メートルの竪穴一基が検出され、これが唯一ペルシャ時代の層（第二層）とされた。それは鉄器時代の層まで深く掘込んだもので、北側と東側の一部が現在の居住活動に一部破壊されていた（図4-a）。

竪穴は、パレスチナで検出されるペルシャ時代の遺構として一般的なものである。それらは粘土製の漆喰で内側を固めたもので、通常は直径が一メートル～二メートル、深さは二メートル～二・五メートルである。前項において、パレスチナではペルシャ時代から初期ヘレニズム時代にかけての遺跡がガリラヤ地方と地中海沿岸付近に集中することを述べたが、このうちの地中海沿岸付近に位置し、エン・ゲヴ以前に日本隊が発掘調査を行ったテル・ゼロール遺跡がある（図1）。ここから検出されたペルシャ時代の遺構（A地区、第五層）については、

「識別されたものは、調査区の全域にわたって発見された竪穴五例のみで、建築物・居住跡などの遺構はともなっていない」とされており[13]、エン・ゲヴと同様の状況であることがわかる。テル・ゼロール出土の竪穴の平面の形状は円形または楕円形で、規模は円形のものが直径一・三五メートル、深さ〇・二メートルとやや小さく、楕円形のものは長径が一・六〇メートル～二・五〇メートル、深さが〇・四五メートル～一・二五メートルとなっており、エン・ゲヴから検出された竪穴と共通している。しかしながら、他の地域では、テル・ジェメからの出土例に見られるような直径六メートル、深さ三メートルという規模を有するものもある。これに伴う明確な床面や漆喰の痕跡は検出されておらず、恐らくは中庭などの屋外に設けられたものと考えられる。

これらの竪穴の機能についてはこれまで二つの仮説が提唱されてきた[14]。その一つはステージャーによるもので、彼はテル・エル・ヘシ、テル・アレイニ、ラキシュ、テル・ジェメからの出土例をもとに、これらが、水はけの良いテルの最高部周辺や居住地に位置し、ラキシュでは五〇箇所以上、テル・ジェメでは少なくとも一〇箇所というまとまった数の竪穴が検出されていることから、食糧の貯蔵穴として用いられたものと結論づけた。上記の遺跡はパレスチナでも雨の少ない地域に立地しているため、こういった竪穴が飢饉に備えたものとも考えられるが、エンゲヴからの出土例はガリラヤ湖という豊かな水源の近くに立地しているために、この解釈は当てはまらない。もう一つの仮説はゴッフェルらによるもので[15]、彼等はベール・シェバから検出された竪穴の土壌の科学的な分析を行い、その結果、竪穴内部の土壌が均一な土質と他の遺構には見られない暗い色調を呈し、さらに骨、歯、植物などの多様な有機物のほかに燐を多量に含むことを発見した。これらのことから、この土壌は明らかに自然に作られたものではなく、人工的に作られた肥料であると結論づけた。つまり、竪穴は肥料を作るための施設であったというのである。エン・ゲヴの竪穴内部の土壌についても、今後こういった科学的な分析を行う必要がある。

エン・ゲヴ第一層の問題点

エン・ゲヴでは第二層がペルシャ時代に、第一層がヘレニズム時代に属すると考えられている（図3）。第二層はペルシャ時代に典型的な竪穴である。ヘレニズム時

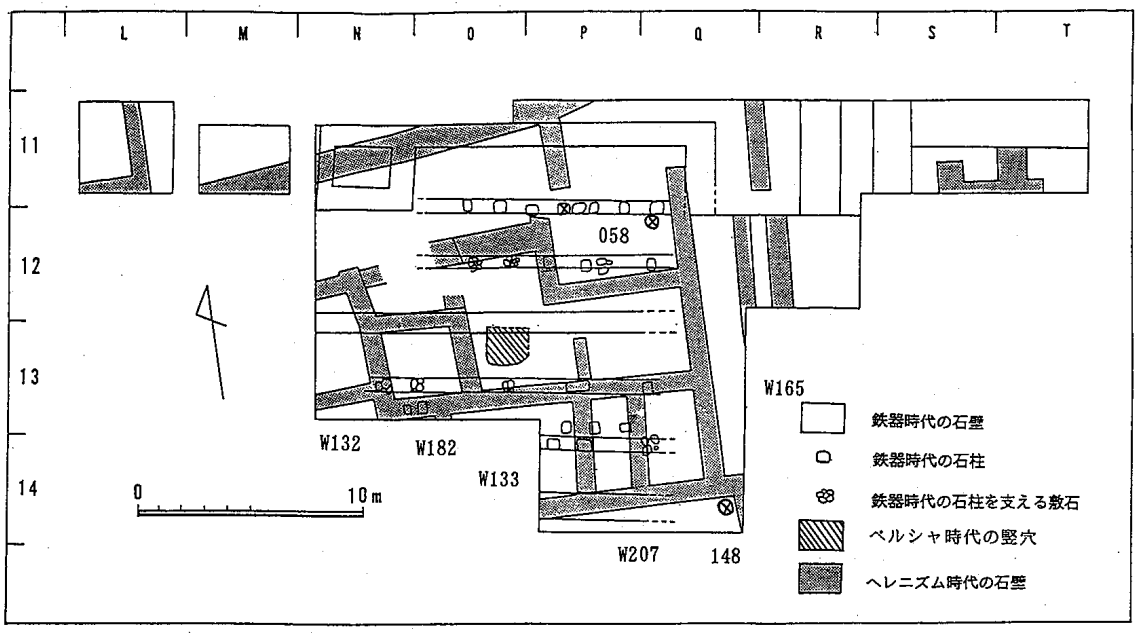

図3　エンゲヴ遺跡　遺構配置図

代の遺構と考えられる第一層は、中庭を中心に配置された矩形プランの居住跡と擁壁であるが、実はこのうちの壁の基礎部の一部分は明らかに二つの段階を示している（図4-c）。一部で壁の基礎部に二つの段階が見られたにもかかわらず、表土下の第一層が一括してヘレニズム時代と解釈された原因は、(1) 床面の明確な判断が困難であったこと、(2) 第一層の二つの段階のプランがほぼ同様であったこと、(3) 前述のようなペルシャ時代の考古学的な状況に対する理解不足、(4) ペルシャ時代および初期ヘレニズム時代の物質文化に関する研究の遅れ、があげられる。

ところが、第一層、すなわちヘレニズム時代に一括して属するとされた土器をより詳細に分析すると、かなりの量の初期ヘレニズム時代のものと思われるものが含まれることが判明した[16]。例えば、これらは内湾する口縁部と緩やかにカーブする胴部を有する碗、高台付底部を有する鉢や皿、外反する口縁部と胴部の中程に屈曲部分を有する鉢、底部から胴部への立ち上がりに厚みを持つ香油瓶、などといったものに示されている。このことから、実は一括してヘレニズム時代のものとされていた第一層が明確に二つの層を持ち、その遅い段階は典型的な後期

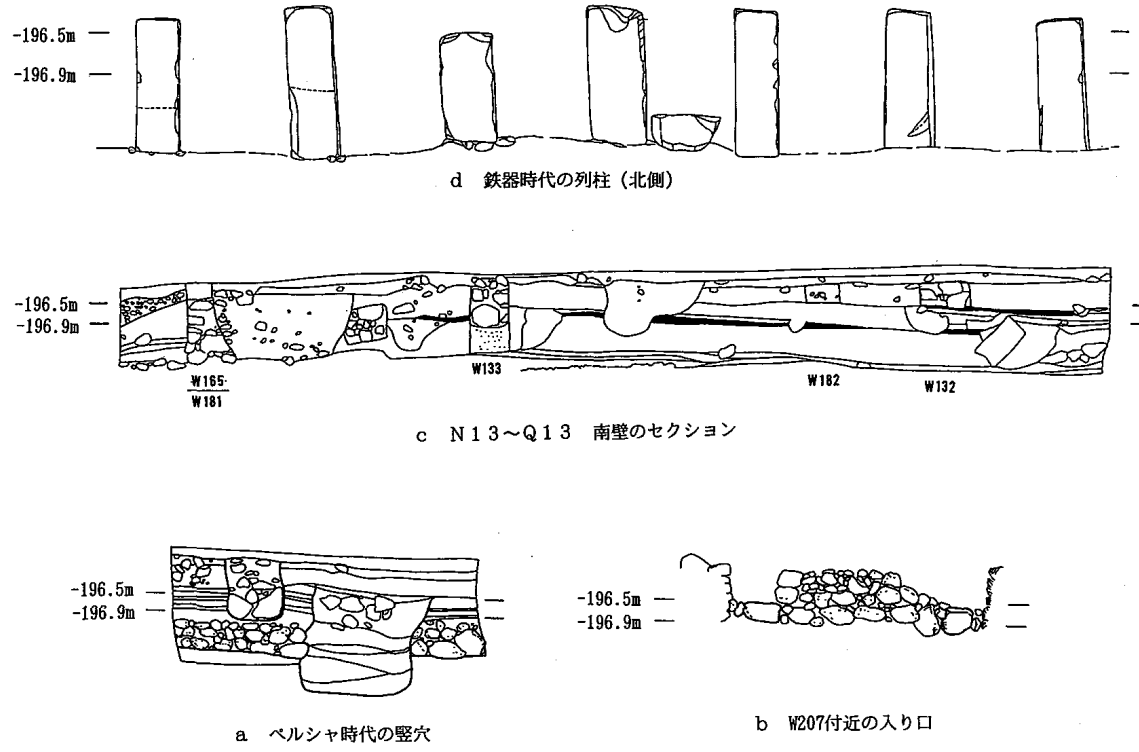

図4 関係する遺構断面の様子

ヘレニズム時代に、早い段階は初期ヘレニズム時代やペルシャ時代の竪穴と同時代に属する可能性が考えられる。そこで、まず遺構図面の再検討を行い、第一層に二段階があることを確認し、それらのレベルを比較した。次にそれらの数値とペルシャ時代の竪穴のレベルを比較した。さらに、ペルシャ時代のものと考えられる土器の分析を行った。

遺構図面の再検討

まず、第一層の壁の基礎部に二段階あることと、それぞれの基礎部のレベルの確認を行った（図4-c）。それは、ちょうどN13からQ13の南側のセクションに見ることができる。ここでは基礎部のレベルに二つの段階があり、それらはほぼ海抜マイナス一九六・五メートルと海抜マイナス一九六・九メートルの位置にある。[17] さらに、わずかではあるがそれらに対応する床面の跡も検出されている。

次に、第一層の遺構の中で床面の高さと関係あると思われるもののレベルを同様に確認していった。ヘレニズム時代の明確な床面の高さは、鉄器時代の北側に並ぶ列柱のうち、中程の一本の上部に穿たれた穴から判断でき

る（図4-d）。これはヘレニズム時代の人々が水利施設として利用したものと考えられるが、そのほかにも、ロードス式壺形土器を再利用した水利施設一点（図3-058）、炉一点（図3-148）、部屋の入り口部分のステップ一点（図3-W207付近、図4-b）が、どれも建物の中庭の高さを考える上で参考となる遺構である。その結果、鉄器時代の柱を再利用した水利施設の上部は海抜マイナス一九六・二五メートル、別の水関係施設（058）は海抜マイナス一九六・三メートル、炉（148）は海抜マイナス一九六・三メートル、部屋の入り口部分ステップ（W207付近）は上部は海抜マイナス一九六・五メートルで下部は海抜マイナス一九六・九メートルと、やはり海抜マイナス一九六・五メートルを基本にした遺構と海抜マイナス一九六・九メートルを基本にした遺構に区分することができた。

次に第二層のペルシャ時代の竪穴のレベルを再検討した（図4-a）。この高さは上面が海抜マイナス一九六・五メートルで（おそらく新たな床面が設けられたために平らにならされたものと思われる）、海抜マイナス一九六・九メートルで形状が変化し大きな石が詰められていることから、これらのいずれかの時点で使用されなくなったと考えられる。

これらの検討結果を総合すると、これまで第一層（ヘレニズム時代）と一括されていた遺構に明らかに二つの段階が見られ、しかもそれらの高さはほぼ海抜マイナス一九六・五メートルと海抜マイナス一九六・九メートルにあること、そしてこのうちの下部、つまり古い段階は第二層のペルシャ時代の竪穴と高さの点で一致することが確認された。

土器の再検討

ペルシャ時代の土器に関する研究はP・W・ラップとN・ラップが七〇年代までにある程度まとめており[18]、これに八〇年代までにスターンが改良を加えている[19]。その後、テル・ハミル[20]、テル・エル・ヘシ[21]、テル・ゲゼル[22]といった遺跡からのまとまった出土資料に関する整理が進められた。ペルシャ時代全体の編年としてはまだまだ不充分なものではあろうが、現時点における可能な理解として、これらを基にエン・ゲヴからの出土物の再検討を行った。その結果、エン・ゲヴでは竪穴のみならず、それ以外の地区からもペルシャ時代の土器が出土していることが判明した（図5）[23]。以下に、エン・ゲヴ出土の土

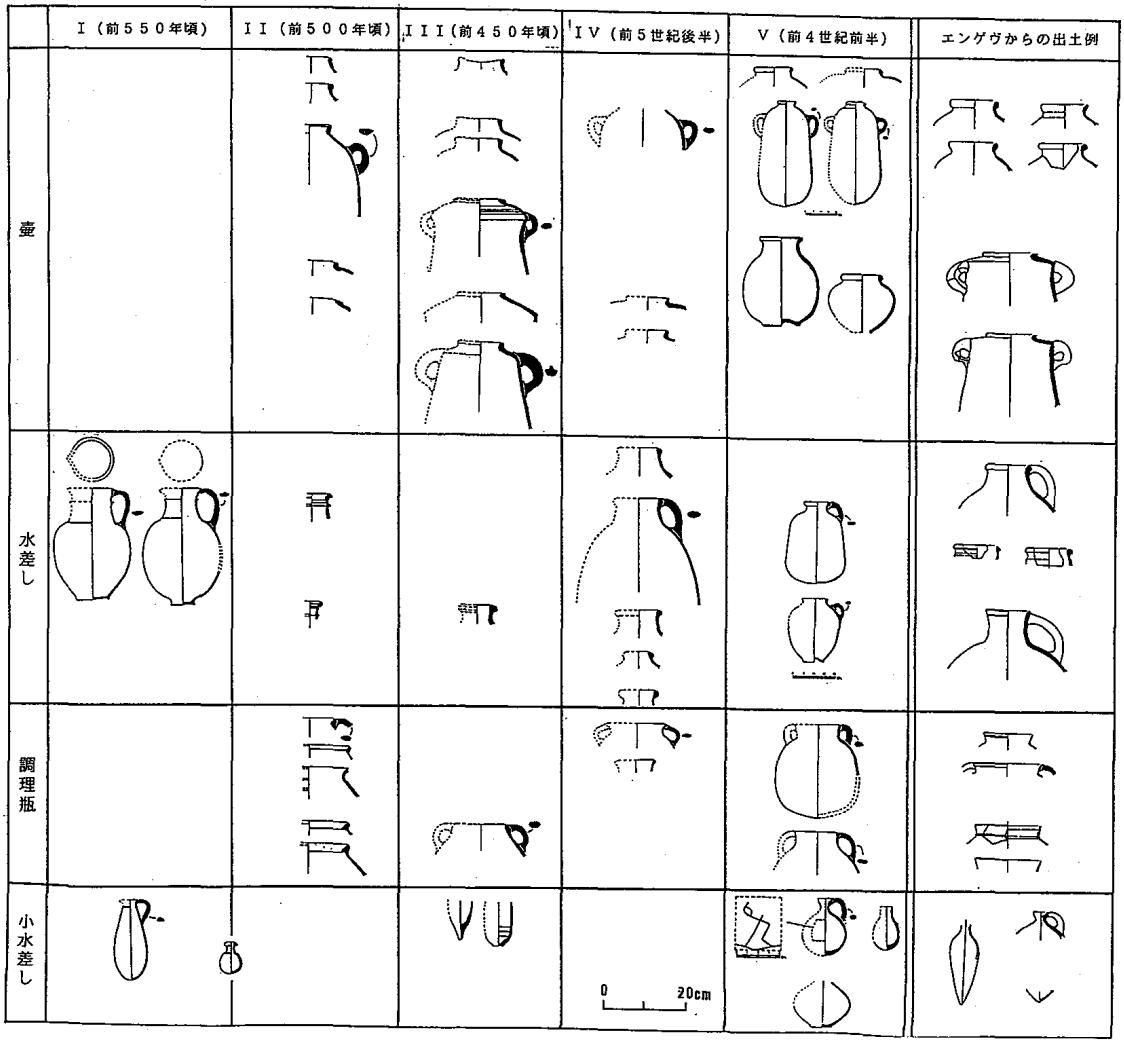

図5　ペルシャ時代の土器

器をラップらの分類と比較しながら形態ごとに分析した。（図は主だった形態別に、左にラップの分類を、右にエン・ゲヴからの出土物を示してある。）

壺は肩部が緩やかに胴部に伸びる通常のタイプと、肩部が直線的で胴部にかけて鋭く折れ、シリンダー形の胴部を有するソーセージ形のものに分類される。通常のタイプは、初期には口縁部の断面がやや丸みがかっており、頸部中程に小さな突帯がめぐらされているが、後期になると口縁部の断面がより丸くなり、頸部中程の小さな突帯は消滅する。これが初期ヘレニズム時代の原形となる。また、初期にはこれとは別に、口縁端部上面に沈線が施され、頸部が曲線を描いた通常のタイプの壺も出土する。

ソーセージ形の瓶形土器は、ごく初期には鉄器時代第二期の伝統である口縁部の断面に丸みをつけたものが一般的だが、ラップのペルシャ第二期では口縁部の断面が平らなものが一般的となる。また、口縁部断面

の先端に丸みをつけた新しい形の口縁部が出現し、また同時に全体がくすんだオレンジ色を帯びるようになる。

水差は主流である広口のものと細口のものに分類される。広口のものは初期からラップの第四期までは、鉄器時代第二期からの伝統である頸部中程に突帯をめぐらせたものが連続して見られる。これに代わってラップの第四期以降に出現するのは頸部に突帯を持たないもので、これが丸底の水差や底の中程の凹形の窪みのある水差に見られるようになる。これらは初期ヘレニズム時代に向けて、より一般的な形態となる。細口の水差は、広口と同様に、その初期には鉄器時代の伝統である頸部中程に突帯をめぐらせたものがラップの第二期まで連続して見られるが、第三期に入ると口縁部の断面が丸みを帯び、頸部に突帯を持たないものが出現し、これが初期ヘレニズム時代へ向けて一般的となる。ただし頸部から肩部へのラインは多様である。

調理瓶の形態はペルシャ時代からビザンチン時代にかけてさほど大きな変化を見せず、その型式的な発達を示すのは困難である。それらは二つの把手を有する丸みを帯びた土器である。頸部はやや垂直に伸びる。但し、詳細に観察するとペルシャ時代の初期には頸部内側に蓋用の工夫が施され、頸部が容器の内側に向かって直線状に、もしくはやや曲線状に伸びているものが見られ、中には口縁端部の断面に沈線が施されたものも見られる。

小水差はラップのペルシャ時代第一期で、それ以前のものより胴部がやや細長いものが出現し、これがペルシャ時代の大半で主流となっている。初期のものは後期のものより器壁がやや厚手で、口縁部の断面はより外反する傾向になる。底部は平底と尖底のものが主で、稀に丸底のものも見られる。このほか、初期にはより小型の香油瓶も見られる。ペルシャ時代第五期には胴部が丸く、丸底の小水差が多く出現し、これが続くヘレニズム時代で一般的となる。同様の小水差で平底のものはペルシャ時代第五期には見られるが、ヘレニズム時代には見られない。そのほかやや角ばった形態の胴部を有するものもこの時期に見られる。

これらのラップの分類とエン・ゲヴからの出土資料を比較検討した結果、以下のような見解が得られた。即ち、壺については通常のタイプでは頸部に突帯を持たず口縁部の断面が丸みを帯びたものが、ソーセージ形の壺は口縁部断面の端部を丸めたものが見られる。水差については頸部中程に若干の突帯を残すものと、突帯を持たず直

線的な頸部を持つものが見られる。調理瓶の頸部は直線的であり、内側には蓋用の工夫は見られない。小水差としては、尖底のものや胴部が丸みを帯びたものが見られ、胴部がやや細長い形態のものは見られない。以上のことから、エン・ゲヴのペルシャ時代に属する資料は、ラップが分類した後期に含まれることが考えられる。エン・ゲヴから初期ヘレニズム時代に属すると思われる遺物が出土している点を併せれば、エン・ゲヴが鉄器時代の終りに一時放棄されたあと、ペルシャ時代の後半から初期ヘレニズム時代を経て、さらに後期ヘレニズム時代に至るまで居住活動が行われたと解釈できる。

再検討の結果と二つの時代の遺構プラン

以上の結果は、第一層と第二層に関するこれまでの解釈を変える可能性を示している。それは、ペルシャ時代の竪穴とヘレニズム時代とされた第一層の下部が実は第二層で、それらの建築プランにほぼ沿って建て直された遺構が第一層であるという解釈である。

これらの二つの層が正確にどの時代に属するかを判断するのは、今後より詳細な土器の分析が行われ、また、ペルシャ時代および初期ヘレニズム時代の出土物のより詳細な編年が完成される時を待たねばならない。しかし、現在のところ、エン・ゲヴの出土遺物は第二層と第一層がペルシャ時代から後期ヘレニズム時代までの広がりを持つことを示している。おそらくは第二層が後期ペルシャ時代から初期ヘレニズム時代、第一層が後期ヘレニズム時代に属すると解釈されるのではないだろうか。

では、これらの二つの時代にはどのような町が営まれていたのであろうか。従来の第一層と第二層を新たな解釈の基に二つの段階に分類してみた（図6）。これらは海抜マイナス一九六・五メートルと海抜マイナス一九六・九メートルという壁の基礎部の高さに着目した分類であるが、数値は必ずしもこれらと正確に一致するわけではない。遺跡の斜面自体が西から東にかけて緩やかに傾斜していることも考慮しなければならない。したがって、これらの分類はあくまでも想定にとどまる。

第6図の下図がペルシャ時代を含む古い段階で、上図が後期ヘレニズム時代を含む新しい段階である。従来第一層と一括されていたプランでは東西にやや不規則に石壁が並んでいたが（図3）、ここでは放射状に伸びる長細い部屋のあるプラン（下）と広い中庭を中心にしたプラン（上）と、やや異なるプランが見える。ただし、こ

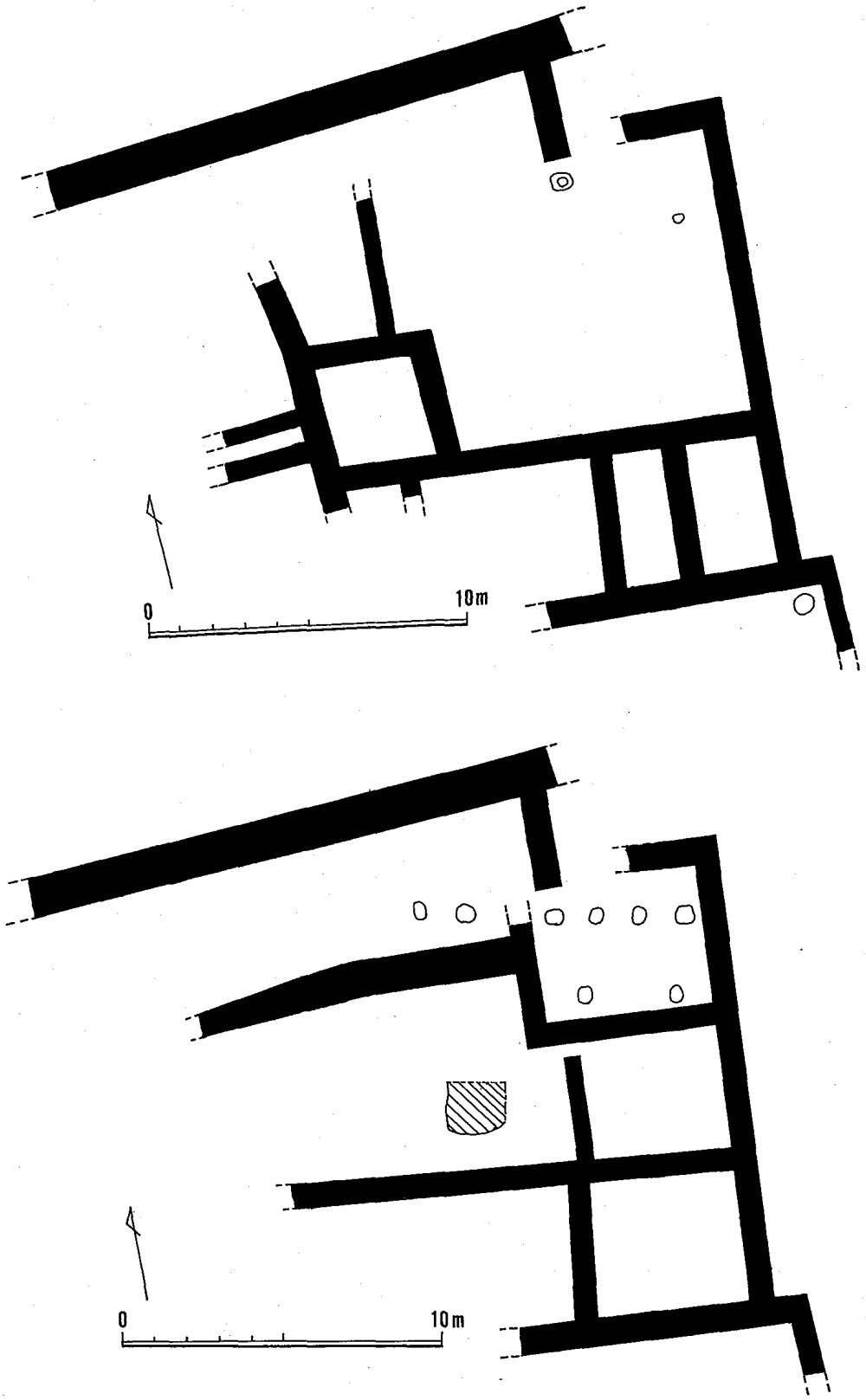

図6　分析結果から想定されるプラン(上：ヘレニズム時代，下：ペルシャ時代)

れらの部分だけで全体のプランを語ることは難しく、ましてや先にペルシャ時代に典型的であることを述べたヒュポダモス式プランとの関連性については、より広い範囲が明らかにされるのを待たねばならない。

理解が難しいのは、下図に見える鉄器時代の列柱である。鉄器時代の列柱は、高さがほぼ海抜マイナス一九六・五メートルのところにある（図4－d）。この状況から考えると、これらの石柱は新しい段階ではほぼ完全に埋没しているが、古い段階、すなわち海抜マイナス一九六・九メートルの時点では明らかに地表に露出していたと想像される。ただし、壁が配置される部分の列柱は倒されたり削られたりしている（図3）。現在残されている列柱を観察すると、数本にほぼ海抜マイナス一九六・九メートル位置から上の部分に摩耗のあとが見えるものがある。これらは、柱の一部が鉄器時代以降の一定期間に再利用されていたことを証拠づけるものであろう。プランも多少ずれるが、これらの鉄器時代の柱はペルシャ時代後期からヘレニズム時代の初期に何らかの目的で利用されていたのだろう。

今後の課題

以上の状況を考えると、ペルシャ時代のエン・ゲヴが当初考えられたような竪穴のみの文化しか残さなかったとは考えにくい。ここで一つ注意しなければならないことは、ペルシャ、ヘレニズムは政治史的区分であって必ずしもこれは物質文化に反映されるとは限らないことである。パレスチナ考古学の時代区分には物質文化史と政治史の双方がとりあえずの指標として用いられているが、この両者は必ずしも一致するものではない。ペルシャ、ヘレニズム時代（特に初期）についても政治史とは別に物質文化史上の区分として再構成される必要がある。エン・ゲヴの調査が再開され、今後、さらなる資料が蓄積されることを期待したい。

追記　この研究を行うにあたっては、金関　恕団長をはじめとする聖書考古学発掘調査団に資料を提供していただいた。また、小川英雄先生、鈴木公雄先生、用田政晴氏には貴重な助言を賜った。ここに、感謝の意を表す次第である。

注

(1) a 金関 恕「旧約聖書時代のエン・ゲブ遺跡」文明発祥の地からのメッセージ メソポタミアからナイルまで、第四回「大学と科学」公開シンポジウム組織委員会編、1990, pp.189-201.

b 日野宏編、高原と湖の遺跡ー古代エン・ゲブの発掘調査、天理大学、1994

(2) W. F. Albright, The Archaeology of Palestine, Harmondsworth, 1960, p142.

C. Watzinger, Denkmaler Palastinas II, Leipzig 1935, p.3.

(3) 当時の歴史的な背景については、以下の文献を参照。

P.A. Ackroyd, Israel under Babyon & Persia, 1979, pp.162-196.

A.T. Olmstead, History of the Persian Empire, Univ. of Chicago Press, 1948, pp135-144.

(4) K.M. Kenyon, Archaeology in the Holy Land, London, 1960, pp.296-302.

(5) F.L. Koucky, "The Regional Environment.", Roman Frontire in Central Jordan, Part 1. (ed. S. Thomas Parker. BAR International Series 340[i], London, 1987, pp.11-40.

(6) M.I. Rostovtzeff, The Social and Economic History of the Hellenistic World, vol.1, Oxford, 1941, p.153.

(7) E. Stern, The Material Culture of the Land of the Bible in the Persian period, Warminster, 1982, pp.xvii-xix, pp.229-230.

(8) アナトリアのサルディスやゴルディオン、オロンテス河口のアル・ミナ（特に第三層のプラン；430-375BC）、エジプトのエレファンタインといった遺跡にも見られる。

(9) E. Stern, "Between Persia and Greece: Trade, Administration and Warfare in the Persian and Hellenistic Periods (539-63BCE)", The Archaeology of Society in the Holy Land, (ed) T.E. Levy, 1995, pp.432-445.

(10) M. Avi-Yonah, The Holy Land from the Persian to the Arab Conquest, A Historical Geography, Grand Rapids, 1979, pp.11-31.

M. Avi-Yonah & A. Kempinski, Syria Palestine II, Geneva, 1979, pp.104-106.

E. Stern, "The Phoenician Architectural Elements in Palestine during the Late Iron Age and the Persian Period.", The Architecture of Ancient Israerl: From the Prehistoric to the Persian Periods. (eds) A. Kempinski & R. Reich, Israel Exporation Society, 1992, pp.302-309.

(11) この時代におけるフェニキアの影響については別稿で扱うこととしたい。

(12) R.H. Smith, "The Southern Levant in the Hellenistic Period.", Levant 22, 1990, pp.123-130

(13) 大畠 清編、テル・ゼロールII、日本オリエント学会、1967, p.10, p.15, 写真XVI.

(14) L.E. Stager, "Climatic Conditions and Grain Storage in the Persian Period", The Biblical Archaeologist 34, 1971, pp.86-88.

(15) Z. Goffer, M. Mocho, & I. Beit-Arieh, "The Disposal of

Wastes in Ancient Beer-Sheba", Journal of Field Archaeology 10, 1983, pp.231-235.

(16) 牧野久実「くレヒズム時代のエン・ゲヴとその周辺ー人の営みと湖ー」史学第六五巻二号、1995, p.109-124°

(17) ガリラヤ湖は海抜マイナス約二〇〇メートルに位置する世界で最も低い淡水湖である°

(18) P.W. Lapp, The 1957 Excavations at Beth Zur, American Schools of Oriental Research, 1968.

P.W. Lapp, "The Pottery of Palestine in the Persian Period", Archaeolgie und Altes Testament, Festschrift fur Kurt Galling, Tubingen, 1970, pp.179-197.

P.W. Lapp & N. Lapp, Discoveries in the Wadi ed-Daliyeh, American Schools of Oriental Research, 1974.

N. Lapp. "The Third Campaign at Tell el Ful", Annual of American Schools of Oriental Research 45, American Schools of Oriental Research, 1981.

(19) 註7参照

(20) L. Singer-Avitz, Local Pottery of the Persian Period (Strata XI-VI), Excavations at Tel Michal, Israel, (Eds. Z. Herzog, G. Rapp. Jr, & O. Negbi), Publication of the Institute of Archaeology. vol.8, Tel Aviv, 1989, pp.115-144. ここではペルシャ時代について六層が検出されているが、それらの出土土器はラップの分類するところのペルシャ時代後半に属する°

(21) W.J. Bennet. Jr & J.A. Blakey, The Joint Archaeological Expedition of Tell el-Hesi. The Persian Period (Stratum V), Eisenbrauns, 1989.

N. Lapp, "Pots, People, and Other Things", Bulletin of American Society of Oriental Research 295, 1994, p.87-92.

(22) S. Gitin, A Ceramic Typology of the Late Iron II, Persian and Hellenistic Periods at Tell Gezer, American Schools of Oriental Research, 1990.

(23) 詳細な土器の報告については、近日刊行予定の発掘報告書に記載予定である°